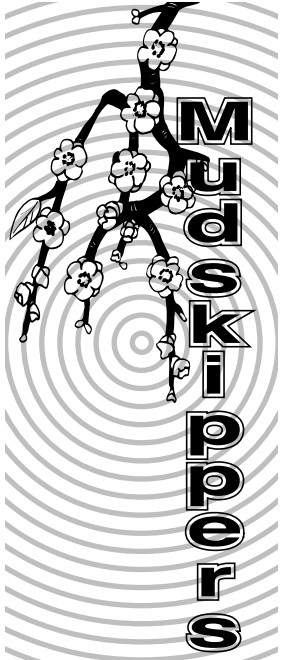


# 学生表彰って知ってる?



第41号

2014年6月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/株昭和堂

## 平成25年度学長賞を、黒木崇子さんと医学部バスケットボール部が受賞!

皆さんは、佐賀大学の学生表彰制度(学長賞)をご存知ですか?これは、国際学会あるいは全国的規模の学会で受賞したり、全国レベルの競技会において優秀な成績をあげた場合などが対象となります。平成25年度は全学部から寄せられた27件の推薦に対して厳正な選考が行われ、医学部からは医学科6年(現在は初期研修医)の黒木崇子さんと医学部バスケットボール部が栄えある第14回学長賞に輝きました。

黒木さんは、昨夏に韓国で開催された第29回 International Congress of the Medical Women's International Associationにおいて素晴らしい発表を行い、「awards for excellence」(優秀賞)を受賞した功績により推薦されました。医学部バスケットボール部は、第47回全日本医科学生体育大会王座決定戦において見事優勝の栄冠を勝ち取っています。

また、医学部では学部長賞の表彰も行われました。各学年の学業成績優秀者、そしてスポーツやボランティア活動など課外活動で活躍した学生が、学部長賞の選考対象となります。自身の努力を評価してもらえ、学生表彰、ぜひ皆さんも頑張ってください。目指してみたいかがでしょうか。

(大野・西原・藤田)

### 平成25年度医学部・学部長表彰対象者(成績優秀者)

注:掲載順はアイウエオ順による。学年は平成25年度のもの

#### 【医学科】

6年	淡浪 由希 金子 翔平 堺 真梨子 柴宮 浩希 奈良崎泰典	3年	園田 有理 林 加野 松尾 和紀 三角優莉奈 吉門あかね
5年	今村 華倫 井門ひかる 緒方 聖友 鈴木 源晟 柚木麻友子	2年	鶴田 成二 寺田 圭吾 西原 歩美 原田 奈佳 藤田 真衣
4年	亀田 美帆 沢見 康輔 田中 成幸 奈良崎小百合 鎗光 志歩	1年	島田 里美 竹下 美穂 崔 麻那 久富 茜音 村上 陽亮

#### 【看護学科】

4年	浦川 由佳 中山 葉月 佛田 幸恵
3年	池田 紗綾 今村 友紀 鷹取 矩美
2年	川崎沙也香 濱田ちいか 山口 沙南
1年	綾部 葉月 上野明日香 小野 詩織



学長賞表彰を受ける黒木さん



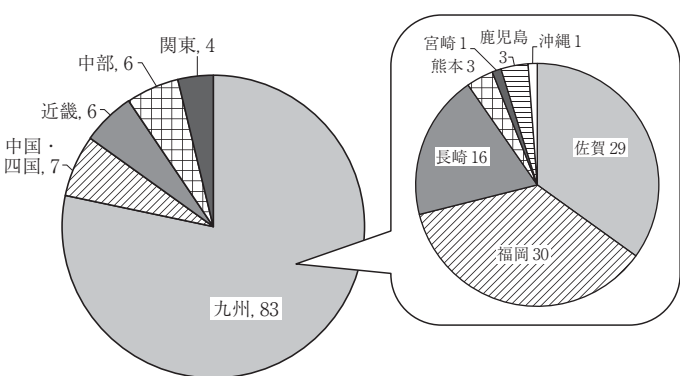
医学部バスケ部の皆さん~全医体会場にて

### 平成25年度医学部・学部長表彰者(課外活動等)

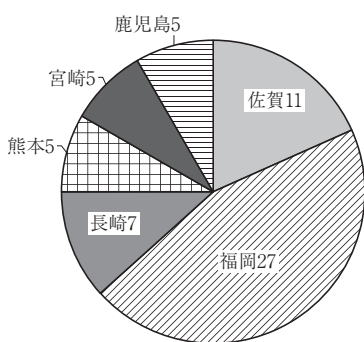
注:学年は平成25年度のもの

個人又は団体名	受賞理由
医学科6年 松田 知也	第65回西日本医科学生総合体育大会水泳競技部門 男子50m自由形 優勝
医学科4年 松岡 優毅	第65回西日本医科学生総合体育大会陸上競技部門 男子三段跳び 優勝 大会記録 14m19
医学科3年 石瀬 裕子	第65回西日本医科学生総合体育大会陸上競技部門 女子3000m 優勝 大会記録 10分53秒48
医学部漕艇部(女子)	第17回メディカルレガッタ 女子 新人女子舵手付きクォドルプル部門 優勝
医学部救急医学サークル「SILS(Saga Instructors of Life Support)」	心停止患者の予後改善に貢献するために、一般市民にBLS(Basic Life Support; 一次救命処置)を普及させることが重要と考え、2010年度から県内高等学校や病院等の学外で多数のBLS講習会を開催している(総件数9件、受講者数560名)。

### 医学科新入生の出身地域



### 看護学科新入生の出身地域



体育系団体	入部者数
硬式テニス部	12
ボート部	10
卓球部	1
準硬式野球部	5
空手部	11
バスケットボール部	12
剣道部	3
サッカー部	9
ラグビー部	3
バドミントン部	11
水泳部	10
バレーボール部	14
柔道部	2
ヨット部	7
弓道部	13
陸上競技部	3
チアリーディング部	7
フットサル部	14
ソフトボール部	2

## ご入学おめでとうございます!

文化系団体	入部者数
現代音楽倶楽部	5
音楽鑑賞部	6
美術部	5
軽音楽部	5
茶道部	5
E.S.S	2
天文学部	9
室内楽部	6
SILS(ACLSサークル)	8
LA部	22

4月3日、佐賀大学入学式が行われ、医学部には、医学科106名(男子62名、女子44名)、看護学科60名(男子5名、女子55名)の新生が入学しました。真新しいスーツに身を包んだ新入生からは、緊張している様子が見られました。

4月7日から20日まで、各サークルによる新生歓迎行事が行われ、皆さんそれぞれに入部先が決まりました。ぜひ充実した学生生活をエンジョイしてください。

(藤田・西原)

STAP細胞

2014年1月末、再生医学に新しい可能性をもたらす基礎研究成果として、STAP細胞という新しい幹細胞が存在するという報告が大々的に報道された。ところが、驚きと期待を持って迎えられる発表は1ヶ月後には全く予期しない方向へ向かい、STAP細胞の存在の真偽にとどまらず、不正・捏造・改ざん・コピーなどという言葉が飛び交い、科学論文の在り方そのものに対して重大な問いを突きつける問題となつていく。

残念ながら今回のような科学論文の不正に関する問題は初めてのことでない。これまでも幾度となく同様の問題が起り、その度に議論が巻き起こった。ただ、科学的な真実であるかどうかについてはその後の追試が可能であるかどうかで、再現できなかつた発表はやがて淘汰されていく運命にある。得られたデータを出来るだけ分かりやすく、インパクトのある形で表現したいという意識は当然あるので、どこまでの形であれば許されるのかは微妙な場合もある。言うまでもなく、無いものを有るものとして発表すればそれは捏造であり、断じて許されるものではない。その意味では、論文の発表は性善説

に基づいた研究者の良心によって成立している。今回のSTAP細胞関連の問題では、デジタル時代故に起こったと思われるコピーの問題もある。データをデジタル信号として扱うことが当たり前になった現在、大量のデータを一瞬にして再生・復元できる。それはネット上で利用できるデータを、あたかも自分のものであるように見せることも可能にする。教員の立場として学生のレポートを見る機会があるが、時として中にコピーと思われるものを得ないものが混じっている。レポートという成績に関わる提出物であり、少ない時間と労力で評価を得ようとする心理が働くことは容易に想像できる。しかしルールに基づいた引用をせず、自分のものとして載せればそれは盗用になつてしまふ。

分かなければそれでいいという人もいるかも知れない(パクツイなんて当たり前、カンニングだつてそうだ?)。短期的にはその場はいい評価を得られるかもしれない。しかし、いったんそれが露見してしまうとどうなるであろうか。間違いなく周囲から本人に向けられる評価は180度変わってしまうことは避けられず、信頼は失墜してしまうことになる。その意味では、レポートにしろ、学術論文にしろ性善説を信じたいところであるが、学生の皆さんはこの問題をどう思うだろうか。

(尾崎 石太)



# 新任教授 挨拶



眼科学講座  
教授  
江内田 寛

皆さん、こんにちは。

この度平成26年1月1日  
をもちまして、第3代の  
眼科学講座教授に就任  
いたしました江内田寛(え  
ないだ ひろし)と申し  
ます。

私は北九州市出身で、  
地元の明治学園から小倉  
高校を経て、福岡県立医  
科大学に進みました。学  
生時代はラグビー部に所  
属し、かなりの時間を部  
活動に費やしていた記憶  
があります。卒業同大  
学の眼科に入局し、大学院  
さらに関連病院勤務の後、  
九州大学眼科に転籍しま  
した。それから大学病院  
や過疎地を含む関連病院  
を転々とし、2007年  
に九州医療センター眼科  
医長に就任しました。当  
時、九州医療センターの  
心臓外科には現佐賀大学  
病院長の森田教授も在籍  
しておられました。その  
後再度九州大学を経て、  
現在に至っております。  
佐賀大学眼科は初代教  
授の大野先生が開講され、  
その後昨年まで第2代教  
授の沖波先生に引き継  
がれ、これまで佐賀県の  
眼科医療の大きな柱とし

てその役割を果たしてき  
ました。  
一般に情報の80%以上  
は視覚を通じて得られる  
と言われており、眼は体  
の中でも特に小さい臓器  
ですが、日常生活を送る  
上では極めて重要な役割  
を果たしています。その  
眼の中には時に糖尿病網  
膜症、緑内障や加齢黄斑  
変性など、失明にいたる  
様々な重篤な病気が生じ  
ることがあります。昔は  
なかなか治療が困難な状  
態の病気でも、最近の医  
療技術の進歩により、以  
前には考えられなかった  
ほどの回復や予防が可能  
になってきました。した  
がって患者さんの生活の  
質(QOL)の維持のた  
めに眼科医の果たす役割  
は大きく、特に今後さら  
なる高齢化社会を迎える  
にあたり、眼科のニーズ  
はいっそう高くなると考  
えられます。

とところが臨床研修制度  
が変更されて以来、近年  
特に地方都市で問題と  
なっている医師不足につ  
いては、眼科の分野でも  
同様の問題を抱えていま  
す。佐賀県の診療状況を  
見てみますと、眼科医総  
数は80名弱であり、全国  
的にも決して多いわけ  
ではありません。その中  
で大学病院の眼科が果た  
す役割には、まず最後の砦  
として高度な眼科医療を  
提供するという大前提が  
あると考えています。  
そこで診療面について  
は、失明の不安を抱えた  
患者さんの気持ちや苦し  
みを理解し、佐賀大学眼  
科で安心して質の高い最  
先端の医療を受けていた  
だくことができるよう、  
先端の医療機器をふくむ  
診療環境の整備と高度な  
技術を有する眼科医によ  
る運用を重点に進めてい  
きます。現在の診療科の  
特色としては、特に自身  
の専門領域でもある網  
膜・硝子体分野を中心に、  
角膜炎、緑内障、白内障  
や眼腫瘍などに対し手  
術による治療を軸に体制  
を構築しています。それ  
に加え、大学病院での入院  
治療が必要な難治性ぶ  
どう膜炎などの内科的加療  
なども含め、眼科の幅広  
い領域に対応が可能な  
なっています。また関連  
病院を含む県内外のさま  
ざまな医療機関や内科を  
はじめとする他診療科と  
も連携しながら、さらな  
る地域医療の充実と発展  
に貢献したいと考えてい  
ます。  
研究面に関しては、自  
身はこれまで臨床の現場  
で遭遇した問題点を解決  
する目的で、トランス  
レーショナルリサーチを  
基盤とした開発研究に力  
を入れてきました。特に  
最近では創薬や手術用の医  
療機器の開発を主に行っ  
ています。今後はこれま  
での方向性を踏襲し、自  
身を含め若い先生方にも  
臨床への応用を念頭に置  
いたトランスレーショナ  
ルリサーチの実践を推進  
したいと考えています。  
当面は現在進行中のプロ  
ジェクトについてその完  
成を目指し、医局員と協  
力しながら引き続き継続  
していく予定です。それ  
に加え、企業に工学系学  
部を加えた産学連携およ  
びクロスフィールドリ  
サーチとして、現在研究  
の途上にある網膜の酸素  
飽和度測定装置の開発を  
早急に進めます。さらに  
他診療科との連携による  
臨床研究や、可能であ  
れば基礎教室とも連携し  
ながら、将来の臨床へつ  
ながる可能性のある研究  
の推進にも努めたいと考  
えています。



ラグビー部の仲間たちと(最前列左端が筆者)

と考えています。また同  
時に、未来を担う若手医  
師の育成にも励みたい  
と思っています。そのため  
には医師の確保と教育が  
重要になります。新卒医  
師の勧誘に加え、女性医  
師の復帰支援、転科医師  
の受け入れ、他県からの  
眼科医の受け入れなど、  
様々な方法を駆使して医  
師の確保に努め、特に市  
内の病院群を含め効率良  
く教育を行い、即戦力と  
なる眼科医を養成してい  
きたいと考えています。  
以上を踏まえ、今後は  
佐賀県の眼科医療の発展  
に全力を注ぎたいと思  
います。同時に、特に研修  
医や学生の諸君には眼科  
への興味を持ってもらえ  
るようなアクティビティ  
の高い講座づくりを目指  
します。興味のある  
方は是非一報ください。  
.....



病因病態科学講座  
教授  
相島 慎一

本年2月1日付で佐賀  
大学医学部病因病態科  
学・診断病理学分野の教  
授に就任しました相島慎  
一です。この場を借りて、  
学生の皆さんに自己紹介  
と病理医の仕事について  
説明したいと思ひます。  
【野球小僧】  
私は佐賀市諸富町出身  
の生粋の佐賀県人です。  
諸富北小学校、諸富中学、  
佐賀西高校と地元で育ち、  
高校までは野球がすべて  
の野球小僧でした。当時  
から佐賀県の少年野球の  
レベルはとて高く、ど  
この学校も熱心な指導者  
や父兄がいて、地域全体  
が盛り上がりつつありま  
した。小学生の時には毎  
日の朝練に加え、夜9時  
まで車のヘッドライトで  
グラウンドを照らしなが  
ら練習していました。その  
甲斐あって、小学6年生  
の時、小学6年生の時  
には学童軟式野球大会で

# いざいのいきもの

カー場の間の木がそれ  
である。まるで果実である  
かのように木全体がスズ  
メに覆われており、かな  
りグロテスクである(写  
真1。2013年8月18  
日、午前5時撮影)。ズ  
ムアップしてみるとスズ  
メであることが解る(写  
真2)。近づくと「さえず  
り声」がかなり五月蠅  
い。少し嚇かしてみると、  
一斉にスズメたちが飛び  
立っていく(写真3)。  
思わず息を呑む大迫力  
である。

気がつけば前回よりか  
なり時間が開いてしまっ  
た。季節は流れ、足元を  
よく見れば小さな花が咲  
いている。佐賀大学医学  
部のキャンパスの中では、  
様々ないきものがたくま  
しく生きているのである。  
今回はスズメ(学名:  
*Passer montanus*)を  
紹介する。スズメはアジ  
アからヨーロッパにかけ  
て広く生息している。も  
ちろん日本においても、  
本州を始めほとんどの地  
方や離島に生息している。  
『いざいのいきもの』  
であるのに、どうしてそ  
のような鳥を紹介するの  
だと疑問を感じられた方  
が多数であると思う。実  
は鍋島キャンパス内に、  
スズメが集まり一晩中囀  
り(さえずり)続ける木  
があるのだ。医大の北側、  
体育館前の駐車場とサツ  
キが知られている。この  
ようなねぐらは日本全  
国いたるところに見られ  
るようである。担当者が  
調べたところ、竹藪、林  
から街路樹、電柱・電線  
に至るまで様々なパター  
ンがあった。この環境適  
応力の高さがスズメを  
繁栄させたのだろう。  
5月現在、この木には  
そこまで多くのスズメは  
見られない。夏が来るの  
が待ち遠しい。  
(医学科6年  
鈴木源晟)

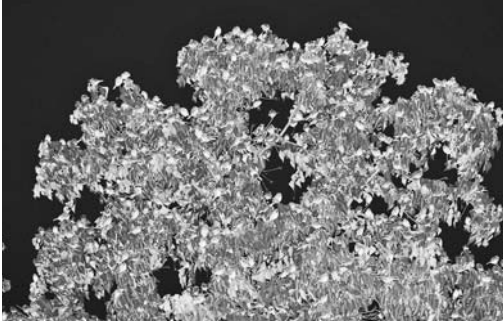


写真1 写真2  
写真3

選びました。2年の外科系研修を終えて、大学院で病理学を学ぶことにしました。初めは単に博士号を取得したいという目的で病理の勉強を始めましたが、それまで知らなかった病理学の奥深さと臨床の現場における責任の重さに徐々に惹かれ、さらに病理医の分野は人手が不足しており、自分が活躍できるチャンスがあるのではないかと気がしてきました。大学院の4年間では充分満足の行く研究成果を挙げられませんでした。本気で病理学、病理診断を学ぶことに決め、そのまま病理医として生きていくことにしました。九州大学病理学教室は、歴史もあり、多くの先輩、多くの同僚に恵まれており、日本で最も大学院生の多い病理学教室です。病理の道を選んで16年になります、多くの方々から押ししてもらい、このたび佐賀へ帰ってくることに出来ました。

【病理がやるべきこと】

私が専門とする診断病理学は、現代医療を支える不可欠な分野であり、カバーする領域も広く、その重要度は日々増すばかりです。しかしながら社会の認知度はとても低く、医療従事者や医学部の学生にも十分理解されていないと感じることがあります。したがって、学生が病理診断に触れる機会を増やすことが重要です。病理に興味がある人はもちろん、病理が苦手な人でも大歓迎です。私の部屋は基礎研究棟2

階で臨床大講堂に近いので、気軽に学生が来てくれることを願っています。現在、年に1回「病理の学校」を開催しており、九州・沖縄の各大学から90名ほどの学生・研修医に加え、40名ほどの病理医が集まり1泊2日の楽しい合宿をしています(日本病理学会九州沖縄支部ホームページ: <http://japob.jp>)。学生研修医の方へ、を参照。佐賀県は、病理専門医の数が日本でもっとも少ない県の一つです。元氣とサービスピ精神にあふれた、臨床医に頼られる病理医を一人でも多く育てたいと思います。

病理診断が担う役割は、①疾患概念の変化に対応する病理診断の最前線、②治療方針(HER2、EGFR、ALK、CD20などの分子標的治療など)決定のための最終診断、③悪性腫瘍に対する治療効果判定、④縮小手術の根治度評価、⑤画像診断と病理診断の比較、⑥病理診断のセカンドオピニオン、などが挙げられますが、病院によっては病理医自ら患者さんに説明する場合もあり、病理診断そのものが医療訴訟の対象となる事例も出てきています。佐賀大病院での病理診断については、診療の質を向上させるために、標本の切り出しや診断の際に病理医同士、さらに病理医と臨床医が円滑なコミュニケーションを取ること、定期的な臨床科とのカンファレンスを充実させること、ミスを最小限に抑える診断チェック体制を確立すること、診断困難例を速やかにコンサルトし専門家の意見を聞くことで、柔軟に対応していこうと考えています。

病理部門では、亡くなった患者さんの病理理解も担っています。近年、病理解剖数は激減していますが、解剖して初めてわかることは少なくありません。病理解剖は医療水準の向上のために必要であり、医療の最終評価としても重要であるだけに、積極的に解剖する体制を構築し、臨床医と共同で診療を検証することが大切だと思います。佐賀大学の発展、佐賀県の医療向上のために努力いたしますので、どうぞよろしく願っています。



耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 倉富勇一郎

本年4月1日付で、進武幹先生、井之口昭先生と続いた耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座の三代

目の教授に就任しました倉富勇一郎です。2004年の7月に九州大学から本学に赴任してきました。医学科4年生以上の学生の皆さんとは顔合わせしたことがあります、それ以外の方はご存じないと思いますので、まず私のプロフィールを紹介いたします。

生まれは現在の福岡県うきは市で、田舎です。久留米大学附設中学・高校から九州大学医学部に進みました。附設中学の2年生、附設高校は24回生になります。当時、附設中では全員が運動部に所属することが義務付けられており、私は剣道部に入りました。顧問は、玉竜旗という高校剣道界では大きな大会で数々の戦績を収めた体育教官で、大学を卒業して2年目の現役同然であり、かなり鍛えられました。おかげで高校1年時に二段を取ったのですが、大学ではがらっと変わってバドミントン部に入りました。それも3年までは医学部よりも全学のバドミントン部で主に活動していました。

当時の九大医学部は、最初の2年間の教養課程を今は無くなった六本松キャンパスで過ごし、単位を取って3年から東区馬出の医学部キャンパスに進学するというシステムでした。1年の間に相應の単位を取れば、2年目はかなり暇になります。というわけで2年目はバドミントンと麻雀に明け暮れる日々でした。全学の部活ということもあり、バドミントンでも相当鍛えました。入学当時58キロしかなかった体重は、2年間で61キロまで増えました。間違いなく筋肉量の増加です。今では見る影もありません。4年以降も医学部バドミントン部で活動を続け、6年時には西医体のダブルスでベスト4まで勝ち上がりました。卒業後も時々プレーし、九大全体の職員チームの一人となって久留米大学附設中学・高校から九州大学医学部に進みました。附設中学の2試合をしたこともあり、全然歯が立ちませんでした。

長々と部活やバドミントンのことを書いてきましたが、それは私の耳鼻咽喉科・頭頸部外科医としての人生にバドミントンが大きく関わっているからです。医学部卒業時に、私は外科系で癌の診療に携わりたいと考えていました。九大の外科に入学しようになっていた私を、耳鼻咽喉科の道に導いてくれたのが、先代の九大耳鼻咽喉科教授(当時は講師)で、バドミントン部のOBだったのです。旨いものをいろいろと食べさせてもらったりもしましたが、大きな決め手は次の3つ、①耳鼻咽喉科領域には頭頸部癌という癌の領域があること、②耳鼻咽喉科では頭頸部癌の外科治療を行う頭頸部外科が今後ますます必要になってくること、③福岡に限らず、九州さらには全国的にみても頭頸部外科医が少な

いこと、でした。この3つは今でも言えることで

「耳鼻咽喉科医であるとともに、頭頸部癌を対象とした頭頸部外科医として一緒に頑張っているじゃないか」という九大前教授のお誘いに心を動かされ、現在の道を歩くことになりました。ちなみに妻は全学バドミントン部の同級生です。こうした経過から、私は医者となつてからこれまでずっと頭頸部癌の診療と研究を中心に活動してきました。ここからは私たちが行っている頭頸部癌の診療を紹介いたします。頭頸部癌は耳鼻咽喉科の領域である「のど」「くち」「はな」「くび」にできる癌の総称です。この領域には「言葉を話す」「食事を楽しむ」「食べる」「人と人とのコミュニケーション」や社会的活動を支え、人が人らしく生活していくうえで重要な機能が含まれています。さらには顔面や頸部という露出部に生じることから、整容(外見)にも十分配慮する必要があります。従って頭頸部癌の治療では、根治とともに臓器・機能・形態の保存が求められます。幸いなことに頭頸部癌の多くが扁平上皮癌で放射線感受性が高いことから、臓器を摘出せず機能保存に優れている放射線治療の効果を高めることで、根治率と機能保存率を高めるという取り組みが行われてきました。現在では抗癌剤や分子標的薬を同時併用する放射線療法(化学放射線療法)が、私たちの施設も含め広く行われるようになってきて

ています。一方で手術技術やチーム医療の進歩により、早期癌に対し機能を保存して根治可能な手術式も開発されてきました。進行癌で広範囲な切除をしても再建外科により機能を回復できるようになつてきました。早期の頭頸部癌の多くは、放射線治療を中心とした保存的治療または病変部を切除する外科的治療のいずれにおいても、根治可能となつてきています。治療法は患者さんの選択で決まりますが、私たちは早期頭頸部癌に対しては、短期間に治療可能で侵襲も少ない手術による外科的治療を推進しています。

一方、進行頭頸部癌でも化学放射線療法で根治でき、機能を保存できる症例が少なくありません。早期癌ほど多くはありません。保存的治療で根治できない場合は手術が必要となり、進行癌では臓器の広範な切除を行うこととなります。その場合でも「話す」「食べる」という機能をできるだけ維持することが必要であり、形成外科や消化器外科とのチーム医療により、大きく切除した舌や咽頭・食道の再建手術を行っています。喉頭摘出による「話す」機能の喪失に対しても、気管食道シャント形成術といった手術などにより、代わりの声を出せるように努めています。切除・再建手術は長時間に及び、担当医も術者・助手も大変です。それでも進行癌が

根治でき、「話す」「食べる」機能を回復した患者さんが日常生活や社会活動を頑張っている姿に、私たちは勇気づけられ診療を行っていただきます。進行癌を克服した患者さんから感謝の言葉をいただいた時が医者冥利を感じるときでもあります。進行頭頸部癌の臓器・機能保存率や根治率は、私が医者になった30年ほど前に比べれば大きな進歩を遂げています。しかしここ15年ほどは根治率の向上がみられていません。私たちの施設でも進行癌の5年生存率は60%程度です。残りの40%程度は治すことができていないのです。この治せていない進行頭頸部癌という病気をどうやって治すのか、それに必要なのが研究です。癌の中にも浸潤や転移能が強い癌とそうでない癌があり、浸潤・転移能が強い癌ほど治療抵抗性があり再発しやすいです。ここでは詳細は省きますが、私たちは進行頭頸部癌が強い浸潤・転移能を獲得するメカニズムを解析し、それを克服する治療法の開発を目指して研究を行っています。

頭頸部癌は当科の診療・研究の大きな柱の一つですが、これ以外にも耳疾患、鼻・副鼻腔疾患に対する外科的治療や、逆流性食道炎に伴うのど(咽喉頭)の異常感のメカニズム解析、声嚙れ(嗄声)に対する音声外科、嚥下障害に対する外科的治療などにも力を入れています。特に嚥下障害は高齢化の中で社会的要請

度も高く、初代の進教授から伝統的に続いてきた佐賀大学耳鼻咽喉科の専門分野でもあり、力を傾注していきたい分野です。そして診療・研究を力強く推進していくために必要なのがマンパワーです。スタッフが結束し、またスタッフ一人ひとりが実力をつけ、それを発揮することが必要になります。その環境を整え、その場を提供することが、教授という仕事のひとつだと思っています。それに当たって座右の銘というほどではありませんが、私が大事にしていることは「漸進」と「マイペースを少し超える努力」と「ふんばる力」です。私たちは、医療を通じて患者さんからたくさん経験を得る積ませてもらっています。一人の患者さんを担当する経験、一人の患者さんを手刀する経験から、少しでも何かをつかみ、徐々にもその度に力を増すことが大切です。授業や実習も同じです。コマの授業や実習があれば、その前よりもその後にはもちろん精励しますが、時にはスポーツにも興じるような楽しく明るい医局を目指していきたいと考えています。医学科学生の中にはマイペースが良い、確かにそうです。無理をしてもなかなか継続できません。ただしマイペースは時に、流されるままになることがあります。自らがマイペースと思う継続可能な範囲を少しだけ超える努力をすること、時には必要と考える

います。さらには難題・難局に当たって踏ん張る力を求められることがあります。その際に大きな支えになるのが、踏ん張った経験です。勉強、部活動、社会活動、その他なんでも構いません。学生の皆さんには学生の間に一度でもよいので、ぐっと踏ん張って頑張った体験を持つてほしいと思います。その経験が必ず将来、医師・看護師としての仕事に生きてくると思っています。

冒頭にバドミントンのことを書きましたが、私の右のアキレス腱は38歳の時のバドミントン部OBに縫合してもらいました。佐賀大学学長の佛淵先生もう切ることもなからうと高をくくっていたら、3年前に遊びでバドミントンをしていて左のアキレス腱が切れました。おそらく全国の耳鼻咽喉科医で両方のアキレス腱を切っている医者は他にいないと思います。それでも医局の野球の試合には頭数不足もあってまだ出場しています。仕事にはもちろん精励しますが、時にはスポーツにも興じるような楽しく明るい医局を目指していきたいと考えています。医学科学生の中にはマイペースが良い、確かにそうです。無理をしてもなかなか継続できません。ただしマイペースは時に、流されるままになることがあります。自らがマイペースと思う継続可能な範囲を少しだけ超える努力をすること、時には必要と考える

います。さらには難題・難局に当たって踏ん張る力を求められることがあります。その際に大きな支えになるのが、踏ん張った経験です。勉強、部活動、社会活動、その他なんでも構いません。学生の皆さんには学生の間に一度でもよいので、ぐっと踏ん張って頑張った体験を持つてほしいと思います。その経験が必ず将来、医師・看護師としての仕事に生きてくると思っています。

# 国・家・試・験

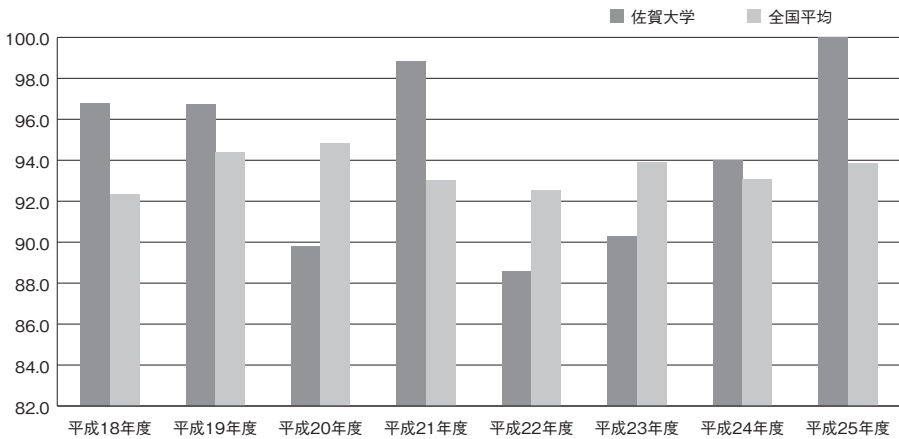
去る3月18日に第108回医師国家試験、25日に第103回看護師、第100回保健師、第97回助産師国家試験の合格発表がありました。本学受験者の合格率は、医師国家試験で新卒者85名が全員合格(全国平均93.9%)、既卒者を含めると、93名中89名が合格(95.7%、全国平均90.6%)で、いずれも全国平均を上回る好調な結果となりました。看護師と助産師は100%で全員合格です。保健師は新卒1名の不合格という結果になりました。

## 平成25年度 国家試験合格状況

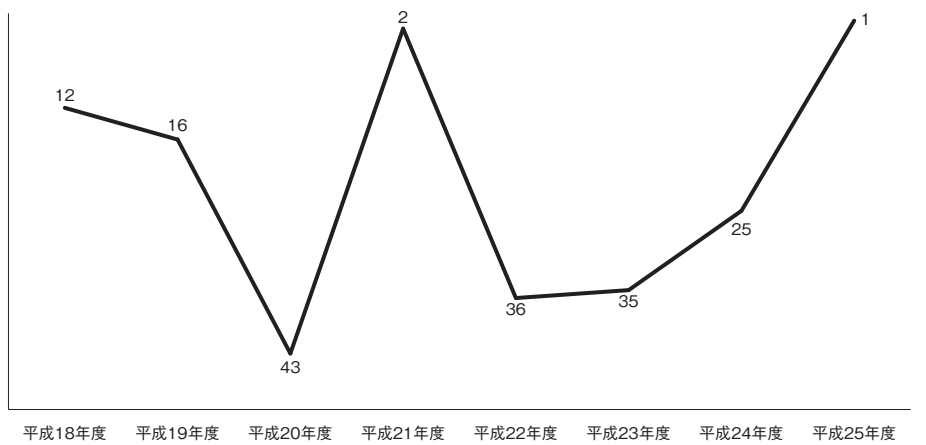
	合格率			全国平均
	新卒	既卒	合計	
医師	100% (85/85)	50.0% (4/8)	95.7% (89/93)	90.6%
看護師	100% (57/57)	—	100% (57/57)	89.8%
保健師	98.3% (59/60)	100% (2/2)	98.4% (61/62)	86.5%
助産師	100% (4/4)	—	100% (4/4)	96.9%

## 医師国家試験データ (H18~H25・新卒者のみ)

### 合格率の推移

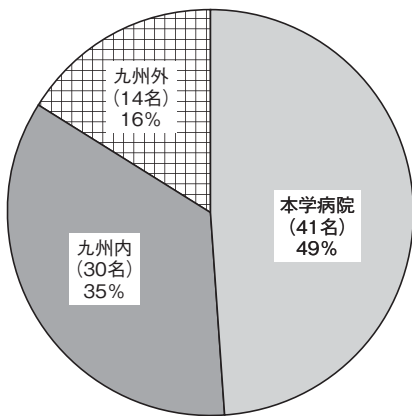


### 国公立大学・全43校中の順位

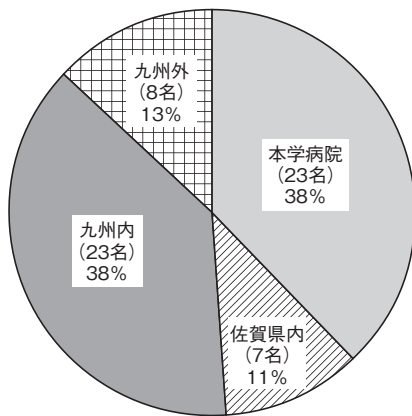


## 卒業生就職先

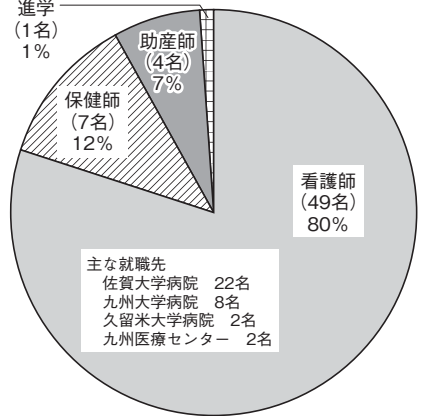
### 医学科地域別進路



### 看護学科地域別進路



### 看護学科職種別進路



医学部学生新聞では掲載記事を随時募集しています。研究室での実習体験、課外活動報告、音楽・書籍評論、グルメ情報、あるいは身の回りの出来事に題材をとったエッセイなど何でも構いません。旅先でのお気に入り風景写真の一枚でも歓迎です。ぜひ活字媒体にして一生の思い出を作ってみませんか。記事は電子ファイルで編集長までお送り下さい (kurata@ccsaga-u.ac.jp)。また学生編集委員も募集しています。Dutyは最低限ですので、兼部もまったく問題ありません。医学部の歴史に名前を刻もうという情熱あふれる学生さん、ぜひ門を叩いて下さい。

(倉岡)

## 編集部からのお知らせ

佐賀医大の建設が進められた昭和の末期、建物の基礎工事の為に、大量の土が出た。そこで古川哲二初代学長がこの土を使い築山を建設しよう御達しを出した。というのも、こ



(柴田健太郎)

この山について学生に尋ねると、「古墳」だとか「初代学長のお墓」といったことをよく耳にする。そこで、本学設立当時の事をよく知る九州大学の西村幸一さん(元・佐賀大施設課課長)にお話を伺った。

時にはこの築山を眺めて、初代学長のメッセージに想いを馳せつつ学業に励んでもらいたい。

山々の稜線から昇る朝日。天山辺りの山中で撮影したものかと思われるかもしれないが、実は医学部食堂横から築山越しに撮影したものである。

この山について学生に尋ねると、「古墳」だとか「初代学長のお墓」といったことをよく耳にする。そこで、本学設立当時の事をよく知る九州大学の西村幸一さん(元・佐賀大施設課課長)にお話を伺った。

## 医学部の風景②



## 編集後記

臨床研究棟の玄関横に住み着いていた老猫「すずめ」(本紙バックナンバー134号に関連記事)が忽然と姿を消して2ヶ月が経過しようとしている。ヒトの年齢に換算すれば間違いなく百歳を超えていたというから、おそろくは何処かで大往生を遂げたのであろう。動物によつては自らの死期を悟ると、死に場所を捜しに出ると聞く。最近では、大分は高崎山の老ボス猿「ベンツ」の失踪も話題になっていった。

動物が死期を悟ることができる理由は謎であるが、さてヒトの場合はどうであろうか? 長期臥床を強いられるような消耗性疾患であれば、体力気力の衰えとともに死期が自ずと分かるかも知れない。しかし、CPA(心肺停止)に到るまで数秒の経過をとるような重篤な心筋梗塞、解離性大動脈瘤などの場合、おそろく訳の分からない内に意識が遠のくであろうことは想像に難くない。自らの死の場面を想像するのは気持ちの良いことではないが、遅かれ早かれ誰しも必ずその瞬間が訪れる。これを悟るのは神業かも知れぬが、せめて医

もう一点、実は編集部にも久方ぶりに面白い話題が舞い降りた。本号より新たに3名の学生編集委員が参加してくれている。編集部一同、新聞発行に全力を尽くす所存であり、今後ともご愛読をお願いしたい。

(倉岡)

## 新聞編集委員

倉岡晃夫教授(編集長)  
河野 史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手、壹岐聡一郎、合田夏希、鈴木源晟(医6)、橋本健太(医5)、大野渚、西原歩美、藤田真衣(医3)、岩永鴻之介(医2)

### 要望などの連絡先

学生サービス課総務  
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp